

ミラレパの接得法 (1)

佐 藤 道 郎

1. 序, 問題の所在

尊者ミラレパ (1040-1123) にみられる衆生教化あるいは弟子の接化の仕方、すなわち通常の生活態度から仏教へ転入せしめる仕方は、チベット仏教において極めて啞目すべきものと言うことが出来よう。ミラレパはヨーガ行者であり、密教者としてカーギュツパの方法によっているが、その伝統は師マルパ Marpa (1012-1096) より承けたものであるが、彼は自らの宗教活動としては宗派によらない、一人のヨーガ行者として人に接していた。従って大学問寺、大檀那をもつ僧院とは関係ない。ミラレパは山中の洞窟に一枚の布衣を着して、その辺りの民衆と接していた。それ故に、このような場では学問的解説による仏教の伝道は不可能であり、ましてやインド伝来の知識と師承をチベットの民衆に誇示することは意味をもたなかったであろう。そこで彼はインドの密教にある歌の形の仏教詩としての Doha とチベットの民衆の素朴な歌謠の形式によって、新たに彼の歌謠をつくり、それによって仏教の世界とそれに到る道を身近かなところからの機縁を用いて教示し、直ちに多かれ、少なかれ接した人は感応を得た。それを集めたものがミラレパの「十万歌謠 (mGur ḥbum)」である。これを素材としてミラレパの弟子の接得の仕方をとり出すことが出来よう。それはチベット仏教の中で特筆すべきものであるが、その転入せしめ方の特徴を具体例を示しながら分析したい。具体的な例としては「グルブム」の中の第17章「レパ・シワウオの章」を示し、全訳し紹介する。

ミラレパの接得の仕方は仏教史全体の流れの中では必ずしも彼のみ特別なのではない。このことは仏教史全体を精査して言表すべきであるが、先づ仏陀釈尊の場合について考察する必要がある。釈尊の場合の伝承は Pali 文も他の言語によるものも何れも直接的伝承ではないが、釈尊の衆生教化の姿を我々に示していることにおいては異議をさしはさむ必要はないと考えられる。釈尊の場合の衆生教化の実情は当時の社会や文化、すなわちインド的社会構造を無視しては良く考察し得ない。バラモンを上位とする階級制度、ガンジス川流域における新興の商業活動、家族的継承ではない自由人としての沙門の宗教の登場、

異った宗教間の論争等教化にまつわる事情は複雑である。こうした状況の中で釈尊の教化はやはりインド文化史の中でも特筆すべき事である。それはバラモン教はその經典の内容は専らバラモンの家庭の父子の相承またはバラモン階級出身の弟子にのみ伝えられて、一般人には秘されていた。呪術的役割をバラモンが村落でもつ限り、この魔術的支配の内容を公開し得なかった。これに反し仏教は、真理をすべて万人のために、階級の差別なしに説いた。勿論、僧院の外における階層間の争いをしたわけではないが、僧院内では出身の階層による差別は全く存しなかった。修行者、すなわち修行者として、沙門として乞食によって生きていく人達に共同の場としての僧院が建立されたのも、仏教がインド文化史、社会史の中でみると極めて特異で、後代にヴェーダーンタが僧院をもつ事は仏教の影響なしには考えられない。勿論、僧院をもつことはジャイナ教にも見られ、沙門の宗教の特徴となったが、仏教の場合には国際的宗教となって海外に出ていった点で仏教の伝播した地域にも上記の特徴は広がっていったのである。しかしまた僧院の規制を否定するような、あるいは超越している所謂狂者といわれる仏教者も独自の役割を仏教史において果している。ミラレパも狂者(sMyon pa)の一人に教えられ、日本の一休禪師ともこの名がつく点では共通である。風狂は教団の組織、体制が整った時代に出るものであろうから釈尊の時代にこの事例を求めることは不必要であろう。従って狂者を釈尊の時代の近くには求めない。

ミラレパの接得の仕方を先にアウトラインを引くならば、彼自身の人格的感化によるものであり、仏教を人格化した彼個人の働きによるものである。教団という背景をもった高位のラマとしての教化ではない。またチベット仏教の特質である学問仏教をもって仏教の学習をスタートすることに依るものでもない。教理とその説明的学習を彼は弟子に示してはいない。チベット仏教に一般的な、五つの学科、論理学、俱舍学、中観、現観莊嚴論、律を以て彼は弟子を導入せしめない。後に見られるように弟子の機縁と器量に対応した教育法で、対機説法といわれるもので、灌頂を授けた後に直ちに修禅に入りチベット密教の指導法を行うのである。今日、ゲールクパヤサキヤパの僧院においてかなり長く10数年を顕教学習に充て、これを終了したところで志あれば、密教を修するというのとミラレパの場合は異なる。但し伝統、すなわち師承ははっきりしている。彼があげるのはマルパとマイトリーパであるが、専らマルパの名を感恩の師としてあげて、帰敬の偈を呈してから多く教化している。居士身であったマルパの教化の姿もミラレパの先蹤としてあったと見てよいであろう。

さて、ミラレパの人格的感化による弟子の接得の特徴は弟子をして自ら仏教に転入せしめる事であって、弟子に応じた問答をしながら、弟子の言うことの意味をミラレパの世界における意味に変えていくことである。一旦相手に順じながら次第にその意味を深化せし

めるところにミラレパの教授がある。第17章においてはそのやりとりの中で、すなわち、少年との問答往来の中で次第に少年のもっている世間的な、一般的な価値観を、すなわち我執という前提の種々な現れを、あらん限り出させて、それをつくしてしまう、なくしてしまうという仕方である。知識を、仏教についての知識をふやすことでなく、逆退的に自己の問題を掘り下げて行くことをすすめる。もちろん、学説の必要をミラレパは完全に拒否しているのではなく、修道者が岐路に立った時に必要であるとしている。正しい方向を伝統からの照射によって見出していくという効用をそこに見る。ミラレパの「自伝」やこの「十万歌謠」にみられる岐路に立つ弟子に対する接得は、弟子のガンボバやレチュンの場合に典型的に見られる様に、ミラレパ自身の厳しいが、然し師弟愛に充ちた接得である。この点に関しては中国や日本の禅宗における師弟の厳しい緊張と慈悲心の現れとも相応する。

ミラレパの教化や接得の特徴は仏教徒でなく、非仏教徒のグループや個人と接した時に特に際立っている。非仏教徒としてはチベットではボン教徒のみをあげ得るが、ミラレパのボン教徒教化に関するのは「十万歌謠」の中の第22章の「ティセ山での奇蹟競べ」と第24章の「死にかけたボン教徒の回心」と第54章の「死者の救済」を主題とする事蹟の中に見られる。そこではミラレパはボン教を始めから頭から否定してかかるのではなくて、ボン教徒の教義を、儀式を認めて、その上に仏教的な改変を行う。このような仕方ではなく、始めからボン教徒との対立が激しい状況であれば、ボン教徒が仏教に対し攻撃的であるときは、ミラレパは神通力を用い、その行きつくところはボン教徒とミラレパの神通力の競走ということになる。これは第22章のボン教徒ナーロー・ボンチュンとティセ山、マナサローワナ湖の辺りで行う大スペクタクルが代表的である。この物語りには後代の潤色がないとは云えないが、ミラレパがこの地域に出かけた事と、ナーローボンチュンはミラレパと同時代人であり、且つこの地に居った事から、何らかのはっきりした歴史的事実はあったと見られる。そこで行った両者の神通力の範囲には増広がなかったとは言えないが、そこにミラレパの教化の特徴も見てとる事が出来る。またボン教徒のところでボン教の儀式をミラレパがとり行うことから始めるミラレパの仕方は極めて柔軟なものと言ってよい。

以上のミラレパの基本的な方向はパーリ仏典にでてくる仏陀釈尊にも見られる。例えば、バラモンに対する教化において例えば Dhammapada の第26章、バラモンの章¹⁾には、バ

1) Dhammapada の訳本は英、独、仏訳および和訳が多数あるが、中村元訳「真理のことは、感興のことは」の中の前者がそれである、岩波文庫版、pp. 64-69. 参照。

ラモンは煩惱を捨て去り、彼岸に達した人、寂靜な行いの人、汚れを離れた人をバラモンとし、螺髪を結ったバラモン階級の姿をした人即ち氏姓によってバラモンなのではないという。釈尊はバラモンということばや外的形態を直接否定せず、このバラモンということばを用いて、バラモンの内的意味を問うて、伝統的な社会的な祭祀階級としてのバラモンを否定していく。この仕方はミラレパのボン教に対する教化²⁾、あるいは仏教内部の人との論争においても見られる。例えば学者からの討論をしかけられた時などである。

相手に順じその中に入りながら、その意味するものの相異を明らかに示していくこの第17章にみられる仕方は、釈尊以来の仏教の伝統に根ざしたものとすることが出来よう。それと同時にミラレパには先にあげた風狂の姿があり、戒律を形式的に固守することをしないところは禪者の幾人かと相通ずるものがある。この風狂の意味も、本来的な仏教の趣旨である仏性にめざめ、仏性を人格に露わにする無限の努力という点にのみしぼって考えれば極めて当然である。然し社会的には激しい批判の意味をもつ。ミラレパのこの面、教団の権威、教団の世俗化に対する批判は後で展開していくこととする。先づミラレパのこの第17章の紹介をもって本論に入ることとする。この章は「十万歌謠」の中で最も長い章であり、個々の具象物については必ずしも如何なるものか確認し得ないが、意味は伝え得よう。

レパ・シワウォの章 (第17章)³⁾

尊師^(P.322)に帰命する。ヨーガ行の自在主、尊者ミラレパ御自身は、夏にシリー山の南方で修禪をして、秋に刈入れになった時に、ケーローニョム^(P.323)に行乞に赴かれて、コクタンの上の方で、睡っている時、夢のお告に、青緑色で、金色にきらめく眉毛と髭のある一人の女の人が、二十才程になった少年を引き連れて来ました。「ミラレパよ、あなた様は心髓に八片をもちますので、その一人この子に灌頂をして、加持して下さい」と言って消えて行きました。夢でした。そこで尊者は夢から覚めて、心に思いました。更にその女性は空行母であり、私のところに福德をもたらし弟子、傑出した心髓を得たと相等の八人が

2) 「ミラレパとボン教」については1991年11月21日、早稲田大学における第50回日本宗教学会で発表し、そのレジユメは「宗教研究」Vol.65. No. 4. pp.269-270 (1992)、詳細は別途に論じたい。

3) テキストとしては「米拉日巴伝及其道歌」(蔵文)、青海民族出版社、1981年版、を用いた。この刊本の底本は不明で、書いていないが、大略、ラサ版と同等である。訳としては The Humared Thous and Songs of Milarepa, Translated and annotated by Gama C.C.Chang, New York 1962. 2分冊。Milarepa, Les Cent Mille Chants, Traduit du tile'tain par Narie-Jose Lamothe, Paris, 2 Parties, 2分冊、を参照。

現れます。その中で、今日の日中に福德にめざめた一人の人と会いに行くのがよいので、彼に確実に利益を施す必要があると考えて、ラムボンシェーゲーの上の方にいらっしまいました。

十万の銀という泉のすぐ傍で、少し睡っていましたら、黒茶色の馬に騎った一人の少年が現れて、「ヨーガ行者よ、あなたはそこで睡って、何をしていますのですか」と言いました。そこで尊者は「施主よ、汝はどこに行こうとするか」とおっしゃいました。彼が言うには、「向う岸に渡って、デンリ・コクナに行きます」と言いました。「それじゃ老ヨーガ行者は水上を渡れないから、施主の馬の背に騎る必要がある」と尊者はおっしゃいました。それで彼が言うには、「私は東の方に、見物に行くのに随行していて急いでいます。あなたが馬に騎ったら、馬を傷めるでしょう」と言って、「尊者と一緒に行くことをも希望しないので先に行く」と言いました。そこで尊者は信頼恭敬によって、グルヨーガの状態に入り、風の三昧を行って、向う岸に到着しました。水中に沈むことなく、水上の向うにす早く行きました。^(P.324)また後を一方の目で御覧になると、彼は今前の方に進んでいて、この時、河水の真中で彼がゆらいで、困難でした。彼が良く見ても、尊者は水中に沈まずに前方に到着しているのを見ましたが、それでも尚、信じないで、自分の眼がたぶらかされているのか、本当に水中に沈まないのかと考えて、対岸に到着しました。そしてそのラマがいらっしゃっている近くに着いて、御足を見ると御足の裏に水がふれることすらないのでした。そこで彼はすぐれた信心をおこして、「ラマが得成就者であることを、私はわからないで、今先馬に乗せることをがまんさせましたことをお許し下さい」と言って、その時馬から降りて、尊者に何度も礼をしました。御足を頭頂に戴いて、強い信心を起してラマにお伺いしました。「ラマよ、あなたの生地はどこですか。勉強はどこでなさいましたか。ラマは何といわれますか。僧院はどこにあって、勉強はどのようになさいましたか。今朝はどこからいらっしまいましたか。今晚はどこにいらっしますか」と言ったので、由来は年代記に詳しく問訊として出ているが、尊者は彼の伺いに対する返事として歌で述べられました。

然らば、良き少年よ
 得道をのぞむ者よ　こちらに耳傾けよ
 私を汝はわかるか
 私を汝が知らないならば
 私はミラレバであり
 生地はグンタン下部と決っている
 修学を求めて、ウとツァンを主に行った

師父はゲトン・ゴミを中心として
ロントン・ハガーまでで
更に、^(P.325) 恩のあるラマは十人程である
法はタントラ部で前期の訳を聴聞しました
彼が学説の法を知る事高く、
特にハジェ・ヌブチュン
猛利な咒文、赤黒ザゴン神の法を聴聞した
彼は成就法と御事業の実行に善巧でも
わたしは増益¹⁾を少しも断っていない
尊者ナーローパとマイトリーパの加持をうけ
心法そのものをもつ女と逢って
身体の縁起の要点を育んだ人が
南方チュケルというところにいらっしゃると聞いて
師父、訳師としての名声を遠くから聞きました
お名前を聞いただけで髪は立ち
難路を克服してチェンガに到着しました
お顔を拝見したらすぐに見方が変わりました
彼は生々世々のラマであるのは確か
尊者は比類なきホタクの人
宝と財の礼物は私にはありませんでした
身体とことばで仕えることを沢山しました
甚深なタントラ喜金剛を聞き
特にナーローの方便道を請問しました
加持力ある律義 (samvara) を
成熟する道である四灌頂を得て、
大印の法と逢って
真実義である心の本性を見ました
根本である法性、現象を離れたものを悟りました
総じて口伝の大河四種の中で
偉大な九つの教誡 (九分教) の良質を取り
甚深な九つの要点の精華の核心をとり出し
修禅は脈管、気、精液を修めました
対象としての気と心の二つの自在を得た

私はそれ故に虚空のヨーガ行者
 内なる集合である四大を混合し
 外なる水大^(P.326)を私はおそれない
 汝を試験してみるだけ
 僧院はギャルのシリーリである
 今朝は上コンタンより来た
 今晚はどこへ行くか決っていない
 私はヨーガ行者の生き方でこのようにある
 若い人よ、快樂としてどんな楽に行くのか

と尊者がかようにおっしゃったので、彼は非常な信心をおこし、涙は間断せず下った。
 黒茶色の馬の手綱を尊者の御手に献じて、お伺いする意味を歌で申し上げた。

また、以前に逢ったことのない得成就者よ
 人間を超出した人よ
 直接にめぐり逢うのが困難な覚者よ
 おことばを聞くのが難かしい化身よ
 御名もさっと聞きさっと聞き得ず
 わかるのも速かに知り速やかに知らず
 敬礼もすぐしたり、すぐしなかったり
 問候もすぐしたり、すぐしなかったり
 また邪法者は後悔してももっと後悔する時
 尊者よ、心から恥じてますのでがまんして下さい。
 黒茶色の馬は風の翼をもっています
 頸の飾りは鈴によって高く誉められ
 斑点ある招福の皮の上に
 暖かく柔かな（鞍の）敷布と
 高貴な木製の鞍が置いてあります
 肚帯は鉄によって側面をしっかりとしばり
 前後の鞍帯は赤色で糸球を結びつけ
 小麦の藁で編んだ変幻せる轡は頭部に
 虎の鞞は笑っている睫毛をもち
 突出した鏡は大きな星がきらめく様です

手綱で大臣は馬の顔の向きを変え
 白い藤の鞭の命令を下します
 内心、馬に「速歩」と^(P.327)呼ぶ時に
 良馬は迅速になった時
 まっしぐらになって先を競う牡馬です
 私、世俗の人間にとっての大きなしるしです
 師父、尊者が乗るために献じますので
 私を、邪法者を地獄に送らないで下さい

とこのようにお伺いして、馬を献じましたが、尊者は受け取らず、汝のそれよりりっぱな馬が私にあると言ひ、彼の伺いに答えて歌でおっしゃいました。

子よ、施主よ、一度こちらに聞け
 私は意識と気の牡馬を
 平等住の絹によるすぐれた事とほめて
 後得智者の如幻と見る幸福な皮と
 自らのさとりのはっきりとした多彩な鞅をつける
 三つの観想の所縁の脇の紐でおさえる
 定中と動中の二門のヨーガを教誡とする前後の鞅帯につける
 生命力の気の轡は頭部に
 時、種々、頂の三の修禪の睫毛をつける
 内なる寂靜は波浪の突出を押さえる
 錯乱の回転である身体の向きをかえて
 悟りは河川の流れの鞭によって打つ
 根本の中観の平原を走ることすばやく
 それはヨーガ行者、私の乗馬である
 逃れるならば輪廻の泥沼からの脱出
 随行するならば、さとの陸地に到ること
 汝の黒茶色の馬は欲しくない
 それ故、少年よ自分の行く場所に行って下さい

と尊者がかようにおっしゃったので、更にまた彼は考えて、馬は欲しくなくとも、御足ははだしであるから、この鞅が必要に相違ないと考えて、インドの突き出た形の鞅がある

のを脱いで、お伺いする意味を歌で捧げました。

(P.328) 尊者、得成就のヨーガ行者、至宝よ
 あなたは地域に執着しないで
 王国をあらゆる方向に遊行していますが
 武器を口に有っている瞋りの犬や
 険しい道で刺が脚を傷つけます
 裸足で行くのは難かしいので
 青いインドの靴という良い召使をもち
 高価な紐によって
 眼前に美しい刺繍の絵と
 黄銅の突出した鋌を打っています
 素材は鹿の皮の上の方の真中から取り出し
 袋の部分はヤクの下腹部の皮との二つ
 靴職人が結合して
 変形させて指の形にした靴に紐を
 名づけてライオンの頭と鰐が満ち溢れた交錯といい
 この靴は少年である私、男のものです
 尊者の御足にこれを捧げます
 私をあわれんで受け取って下さい

とお伺いする意味をこのように申し上げましたが、尊者は受けとらず、汝のそれよりりっぱな靴は私自身にこのようにあると彼のお願の返しに歌として述べられました。

少年よ、聞とそして信をもつ者よ
 総じて三界輪廻のこの父の郷を
 愚痴の黒暗の暗闇が蔽っている
 貪欲の草地の中の泥沼は大きい
 嫉妬の鵝卵石の河べりには粗い刺
 瞋恚の悪い犬は叫んで食べる
 慢心の石山は高いところに懸っている
 私は四つの川の彼方に渡って
 大楽の平地に行く⁴⁾ ことも希求する

4) hbro とあるが、発音の同じ hgro 行くと解する。

素材は無常である幻の雪鹿のなめし皮と
輪廻である邪心の皮底との二つを
業因果の信心によって結合して^(P.329)
外観は種々な感覚に快い色で
自分に見えるのに執着しない紐と
成就の実践の鋸を打つ
命根を縛る三つの帯によって圧する
それがヨーガ行者の私のインド靴である
汝の子供の靴を私は欲しくない
施主よ、自分の行くところの家に行け

とおっしゃって、受け取らなかったのです、更にまた少年はお伺いしました。「尊者よ、靴を受け取らなくとも、一枚の食と衣の外はないから、身を護るのに、眠るときの着物の赤と藍のこのショールを必ず受ける様に」とお伺いして、お伺いの意味を歌にして捧げました。

(続く)